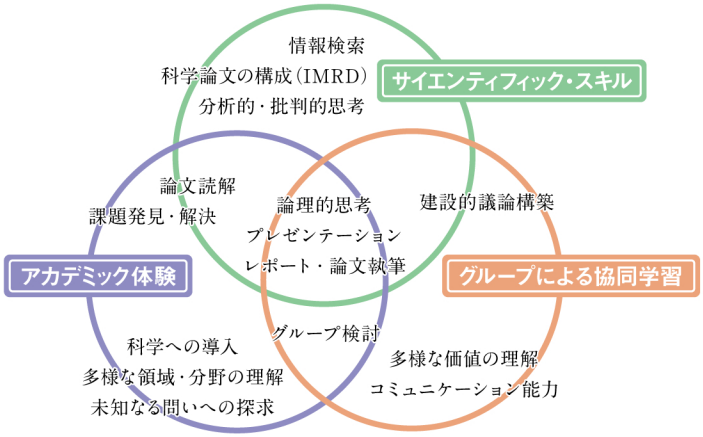
「習う」から「学ぶ」へ
― 初年次ゼミナール理科 ―



初年次ゼミナール理科は、2015年度より前期課程理系必修科目としてスタートした、1クラス20名程度で行うチュートリアル形式の講義です。従来型の大人数講義とは異なり、ここでは学生が自ら課題を設定して、学生同士もしくは教員・TAからのサポートを受けながら解決していきます。これまでの受動的な学習から能動的なものへとマインドセットを転換するとともに、将来の理系研究者を養成する場として「サイエンティフィックスキルの習得」「アカデミック体験」「グループワーク」を学修目標の柱とした講義を提供しています。

理系全学必修で少人数講義、大掛かりなことだとお気づきと思います。全部で100コマ近い講義を開講するにあたり、教養学部だけではなく理系後期課程学部が全面的に協力する、大学を上げた取り組みなのです。農学部でも12コマの講義を担当しており、50名近い教員とTAが駒場生の学びに貢献しています。

せっかく駒場までいきますので、私たちは初年次ゼミを「農学部の哲学」を授ける場としても活用しています。農学とは何かと考えると、「食・健康」「生物資源」「環境」について「俯瞰的に見ること」と「現場を学ぶこと」により課題解決を目指す学問だと言えます。生物（教員）多様性を体現するがごとく、全ての専修の教員が参加して分子生物学から経済学まで多種多様な観点から「農学」という共通テーマに関する議論の場を提供しています。また、体験型ゼミを提供しているのも農学部の特徴です。実際にグラウンドに行って植生のデータを取って解析したり、地理データや経済指標を参考に林業の未来を考えたり、はたまた講義室に実験道具を持ち込んでホタルの光を再現したりなどなど。このような取り組みが理系学生の全体的なボトムアップとして、農学へのアーリーエクスポージャーとして、さらには教員・TAのFDとしてうまく機能していくことにご期待ください。

応用動物科学専攻　応用免疫学研究室
後藤 康之 准教授